

障害当事者による介助実習教育の意義

The Significance of Attendant Care Education by / with Disabled Persons

水川喜文
Yoshifumi Mizukawa

ABSTRACT

This paper discusses the educational meaning of experience of attendant care in the following setting. First, the instructor was disabled person who has been engaged in the independent living movement for more than twenty years. Second, she acted as a model for the care. The goal of this setting was intended that students would attend disabled persons as "human being" not just as object of assistance.

Key words : disability study, attendant care, education for disability

1. はじめに

日本社会における急速な高齢化により介護者や介助者の育成が急務とされる一方で、障害者運動など当事者運動が活発化するにつれボランティアなど民間非営利活動に注目が集まっている。

その中で、自立生活をおくる障害者が、「ケアを受けるプロ」として日常生活介助（ケア）を受けながら講師をするプログラムが始められている（小山内 1997、札幌いちご会 1998）。本稿では、身体障害（脳性まひ）者自身が講師と利用者を兼ねる介助実習がいかにして成し遂げられるか概観したい。特に、学生を対象とした実習を通じて当事者が介助実習の教育を行うことの意義と課題を考えてみたい。

このような介助実習の意義は、第一に、実際に障害を持っている人がモデルとなり実習が行われることにある。現在でも、社会福祉の専門的教育を行っているところさえ、健常者や人形をモデルにして介助実習を行う場合が多い。しかし、生身の障害者がモデルになることで、身

体の動かない部位は動かず、痛い部分は痛いという当然といえば当然の事実を目の当たりにすることができ、福祉を教養として学ぶ学生にとって貴重な体験となる。第二に、日常的に介助を受けている障害者が介助指導者となることで、受ける側に立った介助指導ができるという意義がある。介助は、介助者の自己満足ではなく、介助される側の望むものをつくってこそ介助といえる。そのためには障害者自身のニーズを的確に指示する介助指導者が必要となる。また、この介助実習は、身体障害者の自立生活運動を行い、社会福祉法人設立をめざしている札幌いちご会に協力を仰いだ。

この介助実習の検討により、本実習の当事者運動における位置づけを探ると共に、教育としての意義と課題を考察することは、今後の障害をめぐる研究・教育にとって重要であると考える。

2. 障害当事者による介助実習指導の歴史的背景

介助される側である障害を持つ当事者が、いかにして団体として、運動として、介助の指導をする実習を企画するに至ったのだろうか。

現在、自立生活センターとして活動している「札幌いちご会」は、脳性まひ障害を持つ小山内美智子と澤口京子を中心に1977年に結成され、20年以上活動を継続している。札幌いちご会では1997年から「ケア塾」という障害当事者がケアの講師とモデルを兼ねるプログラムを始めている。このような試みに至ったのは、札幌いちご会の当事者運動の歴史を考察する必要がある。

札幌いちご会の実践は、次の4期に分けることができる(赤塚ほか 1997)。

- 第1期 1997年10月～1980年2月
「泣きたいときに泣ける部屋がほしい」
札幌いちご会結成から福祉村の運動にピリオドを打つまで
- 第2期 1980年3月～1986年10月
「自分で買って、自分で作って、自分で食べた」
ケア付き実験生活開始からケア付き住宅の設立まで
- 第3期 1986年11月～1990年3月
「街で生きる、共に生きる」
自立生活基金の取り組み開始から自立生活サービス開始まで
- 第4期 1990年4月～現在
「ノーマライゼーションタウンをめざして」
自立生活センターの設立から現在まで

このような運動の経緯から、現在では次のような活動・事業を展開している。すなわち、地域ケアサービス、自立生活相談(ピアカウンセリ

ング)、移送サービス、住宅紹介サービス、小規模作業所「フルハウス」、自立生活体験室である。

札幌いちご会が活動・事業を展開していく中で、1997年に開始したのが「ケア塾」である。これは、ケアされる側が講師とモデルになるというこれまでにない発想で開始したプログラムである。このプログラムを開始したのは、福祉制度やケア技術・知識を向上させても、残ってしまう課題があることに気づいたからではないだろうか。このケア塾の発想の背景には「介助」に関わる自立生活運動の思想があると考えられる。

この際の自立生活とは、「家族や施設における介助に終止符を打ち、地域の人々に介助を依頼して、みずからの責任において日常生活を設計し管理していくことである」(岡原 1990→1995)。自立生活における相互行為は、制度に裏打ちされない関係、つまり施設や家族における雇用関係や親密な感情に基づく制度的な非対称的な相互行為ではない。この日常生活介助とは、プロではなく、ボランティアなどの素人による日常的な関わりであり、かつ利用者と介助者という非対称的な相互行為が生み出される場なのである。

日常生活介助において介助者は、顔を洗ったり、髪を櫛でといたりといった自分がふだん何気なく行ってきたことを、相手に対して行うことになる。この際に、初心者の介助者はごく日常的な介助がうまくいかないことを発見する。そして、自分が自分に対して行っている行為を反省的に見ることによって、介助のやり方を推論する。自然的態度のエポケー(A. Shutz)を脱し自らの行為を意識し凝視するのである。この際、介助者は、利用者に対して常識的知識を用いて様々な試みを行いながら日常生活介助を行うのである。

そして、障害者運動においては、障害者の「介

助」と「介護」とは違うという議論がなされてきた。

小山内美智子(1997)流に言えば、かさぶたができたときに、掻かないように処置をしたり、説得するのが「介護」である。これに対して、場合によっては掻いてといわれたら、「もういいよ」と言われるまで(極端に言えば血が出るまで)掻きむしってしまうのが「介助」なのである。極論すれば、介助者は、自分の身体性を捨て去り、障害者の手足と一体化するのである(「介助=手足」論、究極 1998)。

さて、この「身体性を捨て去る」事が、ケアの素人である学生に可能なのだろうか。それを体験の中から「自然に」なれていこうというのがこの介助実習のプログラムなのである。

3. 介助実習の概要と今後の課題

今回の介助実習の概要については、事前の学科会議にて次のような原案を配布して確認された。

生活教養学科「介助実習」計画書

主旨と概要

本介助実習は、身体障害者自身がモデルでありかつ介助指導者となり学生を指導するものである。今回の指導は、札幌いちご会の澤口京子副会長にお願いした。

この実習の意義は、第一に、身体障害者という実際に障害を持っている人がモデルになり実習ができることにある。大学や専門学校では、一般的には健常者や人形をモデルにして介助実習を行う場合が多い。しかし、障害者がモデルになることで、身体の動かない部位は動かず、痛い部分は痛いという当然といえば当然の事実を目の当たりにすることができる。これは学生にとって貴重な体験となるはずである。第二に、障害者が介助指導者となることで、受ける側に

立った介助指導ができるという意義がある。介助は、介助者の自己満足ではなく、介助される側の望むものをつくってこそ介助といえる。このことを実感できる実習となるはずである。また、この介助実習は、身体障害者の当事者運動として全国に高名な札幌いちご会の副会長に直接指導を受けるという貴重な機会となっている。

介助実習で予定されたスケジュールは次の通りである。(学生担当者の作成した配布物より)

日程とスケジュール

- 14:30 部屋に集合
・澤口さんと介護実習
- 15:30 買い物
・白石駅1番出口前フードセンター
- 16:30 調理準備
- 18:00 食事(なにをつくるかは澤口さんに決めてもらう)
- 19:00 後かたづけ
- 20:00 反省会
- 20:30 解散

このスケジュールで6人程度で1つのグループとなり、6月中に3回に分けて各グループ1回ずつ実施した。

実際の実習の進行は、買い物の時間が遅くなると、夕食の買い出し客でゆっくりと買い物が出来ないことが予想されるため、買い物を先にすることになったり、初回は雨が降ったためにリフトバスを出して「ダイエー」に買い物に行くなど臨機応変に対応した。

この介助実習は、1998年度に第1回が開催され、水川ゼミナール(12人)、田淵ゼミナール(9人)が参加した。この介助実習で注目すべきは、講師/モデルの澤口京子氏の臨機応変で卓越した指導である。この介助実習をもとにした研究

は、1998年に開催された日本社会学会大会「日常生活介助における相互行為の実践学 ～脳性まひ者の自立生活から～」として発表された。

この介助実習を通して、障害者、特に全身性障害を持つ人に対する考え方に変化があることが実感できる。今後もこの実習を続けることにより、介助実習の相互行為がいかに成し遂げられているか、障害者に対する学生のリアリティがいかに変容したかなどの始点を持って教育と研究を続けたいと考えている。

文献

- 赤塚ほか 1997 「『自立生活センター』設立への道すじ -札幌いちご会の実践の検証-」、札幌いちご会編『生きる手ごたえ、札幌いちご会。
- 赤塚ほか 1998 「療護施設・グループホーム・一人暮らし -脳性まひ者の3つの生活-」、放送大学三ッ木研究室。
- 究極Q太郎 1998 「介助者とは何か?」「現代思想 特集身体障害者」26-2:176-183、青土社。
- Garfinkel, H. 1967 *Studies in Ethnomethodology*, Prentice Hall.
- 石黒広昭 1998 「学校における参加促進談話 -授業中の日本語非母語児-」、日本発達心理学会第9回大会(日本女子大、1998.3)要旨集。
- Lynch, M. 1995 *Scientific Practice and Ordinary Action*, Cambridge Univ. Press.
- 水川喜文 1994 「定式化作業と実践的行為 -精神科面接における会話を事例にして-」「年俸社会学論集」7:179-190。
- 水川喜文 1998 「日常生活介助における相互行為の実践学 ～脳性まひ者の自立生活から～」第71回日本社会学会大会一般研究報告(於：関西学院大学)
- 岡原正幸 1990→1995 「コンフリクトへの自由 -介助関係の模索-」 in 安積ほか『増補改訂版』生の技法 -家と施設を出てくらす障害者の社会学-、藤原書店。
- 小倉虫太郎 1998 「私は、如何にして〈介助者〉となったか」「現代思想 特集身体障害者」26-2:184-191、青土社。
- 小山内美智子 1997 『あなたは私の手になれますか』、中央法規出版。
- Sacks, H. 1972 "On the Analyzability of Stories by Children", in J.J.Gumperz and D.Hymes(ed.) *Directions in Sociolinguistics*, Holt, Rinehart & Winston, pp329-45.
- 札幌いちご会 1998 『私たちは、助け合って働きたい -「ケア塾」の実践-』、札幌いちご会。
- 立岩真也 1997 『私的所有論』、勁草書房。
- 山崎敬一、佐竹保宏、保坂幸正 1993→1997 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力 -〈車いす使用者〉のエスノメソドロジ的研究-」、山崎敬一、西坂仰編『見る身体、語る身体』、ハーベスト社。
- 上野千鶴子 1996「複合差別論」、井上ほか編『差別と共生の社会学』(岩波講座 現代社会学第15巻)、岩波書店。